牧野先生の思い出

―― 特に藻類を繞つて ――

岡田喜一*

今年の1月18日，牧野富太郎先生は数え年，96歳の御高齢で終に此世を去られた。

先生が我国の植物分類学上に驚異的な数々の偉大な業蹟を残された事は今更，記すまでもない事であるが，先生は顕花植物ばかりでなく，隠花植物にも興味を持つて居られ，藻類，蘚苔類，地衣類，菌類に就いても幾多の貴重な記録を残されて居る。殊に藻類はまだ御郷里の土佐に居られた頃に已に関心をもたれ，当時としては未だ珍らしかつたと思われる顕微鏡を使用しての観察を行なつておられる点は特に興味が深い。

淡水藻類では明治25年(1892)に高知から *Bacillaria paradoxa* GMEL. を発見しクサリケイサウの和名を附せられ又，同年 *Aphanothece stagnina* A. BR. を検出されミナソコミドリモの新和名を与えられた記録（「混々録」11号，1952及び小生宛御葉書）や明治22年（1889）に佐川で *Oedogonium* sp. を明治25年に高知から *Euglena proxima* DONG. を見出された記事（「混々録」12号，1952）が散見し，何れも我国から報告された最初の記録をなして居る。又，車軸藻類に就いても「植物研究雑誌」や「混々録」8号に執筆して居られる。

海藻類に就いても昭和11年（1936）「政界往来」に「コンブは海帯で昆布ではない」と題し，コンブの漢名は海帯で昆布はワカメであると考証され，昭和24年（1949）「アララギ」8号に「萬葉歌の縄ノリ」の題名で縄ノリと云われた藻類はツルモ（*Chorda Filum* LAMOUR.）であると主張されたり，カサノリ *Acetabularia ryukyuensis* OKAMURA et YAMADA に乙姫傘の和名を与え（「混々録」14号，1953）又，「混々録」7号にアラメ，カヂメに関する小文を発表して居られる。

私が先生とゆつくりお話の出来た最後は昭和29年11月5日でその時は先生は珍らしくお元気で各地の御旅行談や採集談に話がはずみお宅を辞去する機会も得られない有様であつたが，その時突然思い出されて「時に佐渡のコルダ　フィルムがねー」と話し出されたが，はてコルダ　フィルムならツ

* 長崎大学水産学部

ルモだがと考えていると果してツルモの乾燥した束を持つて来られて縄ノリの説をされたが，海藻類まで失礼乍ら学名に通じて居られたのは突然の事ではあり意外な感を受けた。恐らく其の時，先生はツルモの和名が急に思い出されず学名の方が先に思い浮ばれたのであろう。

思えば私が先生のお宅へ始めて参つたのは確か大正10年頃と記憶するが，その時，先生は多々良沼から採集して来られたムジナモを盥の中に沢山浮べて研究して居られた。爾来，40年間近く御薫陶を戴いたがその間，植物学上の御教示の外に処世上の御教訓を戴いた点が多く，今思い出すとしみじみと有難さを感ずる。特に逆境に立つた時の心構えを屢々教えられた。

先生の御記憶の確かさは先生を知る誰も驚いた事であるが，殊に昔のことを良く記憶して居られた。例えば50余年前に行かれた北海道利尻山登山のお話など鴛泊の部落から頂上までの道の景観，道路の様子まで詳しく話され恰も最近行つて来られた様で，リシリリンドウの自生地，リシリヒナゲシの採集地点等，私も20余年前に数回，登山して体験して居るだけに其確かな御記憶に驚かされた。又，鹿児島へ50年前に指宿まで採集旅行をされた時のお話には当時，泊られた宿屋の名前まで記憶され，当時のメヒルギの自生状態など実に詳しく話された。

先生の御記憶の良さの一例として忘れられないのは藻類とは関係がないことであるが，昭和23年の秋，全国日本鶏保存会長の故小穴彪先生から昔，日本鶏の鶏冠にショウロ冠と云うのがあつた記録がありそれがどうも「松露」に似ている所から来たと思われるので一度，牧野先生の御教示を得たいとの事だつたので，御紹介旁々同道した事があつたが，その時先生は右の話を聞かれた後，暫く考え込んで居られたが「その『しょうろ冠』は植物の松露ではない。よくお寺の前に見かける蓮の葉の形の水槽の事である。其事は確かこの本に出て居る」と云われて，うず高く積み上げられた古書の中から下積の一書を引き抜かれ，確かこの辺にあつたと云われながら開けられた時，正にその「しょうろ」なるものの図が現われたのでその驚異に価する御記憶力は正に恐るべきものである感を深くした事がある。

先生は御承知の様にどんな初歩の人にも懇切丁寧に御教示下され，謙譲であり，学問に忠実であつた。それで，私など屢々恐縮する事があつたが，3，4年前にも *Euglena proxima* と *Euglena viridis* との差異に就いてお問ねを戴いたが，お手紙にどうぞ御教示に預りたいと書かれ，専門に研究

写　真　説　明

牧野先生を撮らせて戴いた最後の写真は去年の一月六日であつた。此時は永い臥床生活で頬は落ち眼は力なく，すつかり瘠せ衰へて居られ，昼間は昏々と眠つて居られる状態が続いたが丁度，お訪ねした時は朝の注射が利いた後で目をさまして居られた。

此処に掲出の写真は昭和二十九年十一月五日で此時は至極お元気であつたが，この翌年から床につかれた。先生は此写真が大変気に入られたので他日これを半折大に引伸して記念にサインをお願いするつもりで居た所がその後，生憎お訪ねする機会もなくて過ぎ，偶々前記の去年の冬の時はサインをお願いするにはあまりにお気毒であつたが，鶴代さんとも御相談の上，思ひ切つてお願いしてみた所，喜んでペンをとられ床に寝られたまま上向きで書かれた。

それには T. MAKINO age 95 と記された。今となつては之が先生の絶筆になつてしまつた。

している者に対しての儀礼を尽され，年齢，地位等を離れて謙虚に教えを乞うと云う態度に出られる事はとても常人の出来る事ではなく，学問に対する明澄，忠実な先生の御見解の表れを示されたものであろう。

昭和24年は丁度，先生の88歳の年であつた。「植物研究雑誌」は先生の米寿祝賀記念号を出版したが，此号に私は偶々先年，先生の御郷里で採集した未知の Oocystaceae に属する淡水藻があつた事を思い出し，研究の結果，新属新種と認定し，*Makinoella tosaensis* OKADA と命名し，先生のお名前と御郷里を記念したが (植研，第24巻，1—2号)，今となれば之も思い出深いものとなつた。蘚苔類にも先生の名が記念されたのがあるが，藻類では之が唯一のものであろう。

先生の百歳に近い御生涯はただひたむきに植物の研究に捧げられたが，植物に対する先生の愛情は歳老いても少しも変らず，歳90を越えても深夜1時，2時にも及んで止まず，その研究に寄する烈々たる熱情は正に懦夫(だふ)をして起たしむるの慨があり，之が先生の場合は却つて長寿の鍵ともなつたと考えられる。

先生を偲び，過ぎし日の事を思えば思い出は混々として尽きず，有りし日の御風貌は眼前に深い印象となつて浮ぶ。再びもうお合い出来ないかと思えば人の世の淋しさが，しみじみと感ぜられる。

(3月26日夜，三田尻の旅舎にて)